赤染系譜

――帰化系職掌部の信仰と伝承――

青木　敦

一

平安時代初期に編修されたと伝えられる「新撰姓氏録」は、上代から嵯峨朝に至るまでのわが国古代氏族の家系・始祖やその由緒を類別・集成した書として、古代史に関しては言うまでもなく、上古から中古にかけてのわが文学を考える場合にも貴重な資料を秘めているが、遺憾なことに現在はその抄録本しか残っていない。

この姓氏録に採録された畿内を中心とする古代の「氏」一千百余氏は、当時の支配層を形づくっていた代表的な氏族であったと思われるが、これらはその素姓によって皇別・神別・蕃別の三群に分けられている。その中でも特に「蕃別」とは、姓氏録の序にも「大漢三韓之族謂之諸蕃」とあるように、古く、中国・朝鮮等からこの国に渡来・移住して来た、いわゆる大陸系帰化氏族の末裔たちで、その数は全体の三割強に及び、実に三百六十余氏を数える。

この多くの蕃別系氏族の中でも、主流を占めるのは中国の「秦」「漢」系統の氏族や、朝鮮の「百済」「高麗」系統などの著名な大氏族であるが、今これから考えようとするのは、これら諸蕃の中ではむしろ少数派とも言うべき氏族の一つで、「常世」という変わった姓を持つ一族のことである。

姓氏録の蕃別の部を捜索すると、「常世」の姓を名のる氏族は、

常世連　燕国王公孫淵之後也　（左京諸蕃上）
常世連　燕国王公孫淵之後也　（右京諸蕃上）
常世連　燕国王公孫淵之後也　（河内国諸蕃）

の三氏だけである。この「常世」の訓みは、トコヨまたはツネヨであろうが、とにかく非常に珍しい姓と言うべく、他文献にもごく散発的にしか見あたらないようで、また、これに似た姓としても続日本後紀の中（巻第十四）で、やはり帰化系の「楊津連（唐系）」が賜わったという「恒世宿禰」が見えるぐらいである。「連（むらじ）」や「宿禰（すくね）」が、古代氏族制度において姓や身分の尊卑を表わす「姓（かばね）」であることは言うまでもない。

さて、この「常世連」の家系を遡源すれば、姓氏録には「燕国王公孫

淵之後也」とあった。大体、中国史上「燕」を名のる国は、こまかく検索すると大小数ケ国に及ぶが、その中で最も著名なのは、周代の一国で戦国七雄の一に数えられたいわゆる「北燕」で、河北から朝鮮北部一帯にわたって六百数十年間に及ぶ王朝を樹立したが、紀元前二二二年、秦の始皇帝に滅ぼされたと伝えられている。しかし、「常世連」の遠祖と言われる公孫淵の「燕」国はそれではなく、紀元二〜三世紀ごろ、いわゆる後漢の末から三国時代にかけて、遼東を中心に勢力を伸張した公孫氏の「淵」が、当時の魏・呉・高麗などと角逐の末「楽浪公」となり、魏の景初元年（二三七年）自立して「燕王」と称したその国をさす。しかし、翌二三八年、魏は司馬懿を将とする大軍をもってこの「燕」を攻め、首都襄平は陥落して公孫淵は敗死し、その首は魏都洛陽に送られたと伝えられる。これらの経緯は「三国志」の巻八に詳しいが、さらにつけ加えるなら、その「魏志」の「東夷伝倭人条」、俗にいう魏志倭人伝によれば、この公孫氏の燕が滅んだ翌年、つまり景初三年は、「倭」の女王「卑弥呼」が初めて使者を魏国に送って朝貢し、時の明王から「親魏倭王」の称号と金印を授けられたと伝えられる、わが古代史上特筆すべき年なのでもある。

とにかく、こうして敗亡した悲劇的な武将・公孫淵の一族残党が、祖国滅尽ののち逃亡離散して、その中の一群が長い歳月をかけて朝鮮半島を流浪しつつ南下し、やがて玄海の波濤を越えてわが国に亡命してきたことも十分想像できるのであって、「常世氏」とは実にこのような滅亡燕朝の末裔たちだったのであろう。

しかし、わが国の古い文献の中に、いざこの「常世氏」に関する記録を探ろうとすると、それがあまりにも少ないことに気づくのであり、たとえば六国史の中には僅かに続日本紀に、

八月丙寅、賜二正六位上赤染造広足、赤染高麻呂等九人、常世連姓一、

（巻第十七　聖武天皇　天平十九年）

九月丙戌朔（中略）、正六位上赤染造広足、赤染高麻呂等廿四人、賜二常世連姓一、

（巻第十八　孝謙天皇　天平勝宝二年）

と見え、さらに、

乙未、右京人従六位上赤染国持等四人、河内国大県郡人正六位上赤染人足等十三人、遠江国蓁原郡人外従八位下赤染長浜、因幡国八上郡人外従六位下赤染帯縄等十九人、賜二姓常世連一。

（巻第三十四　光仁天皇　宝亀八年四月）

とあるだけだが、前の二つの記録は、日付と人数に異同があるが内容は全く同じなので、これはどちらかが誤伝であろうと考えられている。が、とにかく、これらの記録を通じて明らかなのは、「常世連」の姓を賜わっているのは、いずれも「赤染」を名のる一族だったということである。

しかし、この「赤染氏」に関しても詳しい記録があまりない。姓氏録には、わずかに末尾の「不レ載二姓氏録一姓」の中に「赤染」の姓が入っているだけで本文中には見えず、この続日本紀にその名が録されている赤染造広足らを始めとする赤染一族にしても、それがどういう来歴を持っ

た人々であったのか全くわかっていない。姓氏家系大辞典には「赤染造」を始めとして「赤染」を名のる諸国の十数氏が載せられているが、むしろ、史上一般に「赤染」の名で知られるのは、平安中期の女流歌人で、右衛門志・赤染時用の女であった「赤染衛門」くらいのものであろう。

ただ、まぎれもなく確かなことは、わが国の古代氏族の中で、これら「赤染」を名のる部族は、その名の表わすとおり、古代の紅藍染色の仕事を専門とする職能集団の「部（べ・とも）」の一つであって、それら「赤染部」の部民を統括した頭梁「伴造（とものみやつこ）」こそ、燕系帰化豪族の「赤染造」であったということである。後世の赤染氏一族がすべてこの裔であることは言うまでもない。

木綿糸を紡ぎ麻を績んで布を織った古代にあっては、その機織りを専業とする「服部（はとり）」らとともに、その糸や布を美しく染め上げるための染色術を持った「染部」は、当時の衣生活や服飾のために重要な役割を果たしていたのであり、「赤染部」はまさにそれらの染色を掌る代表的な職掌部であった。

古く、麻や木綿や絹の、糸や布を染めるために、人々は山野に自生する多くの植物の、草の根や樹の皮や花や実や葉などを原料として、これを煮出して染め汁を作ったのであった。たとえば、古事記に見える「八千矛の神」の歌は、蒼古な代の「神語」として呪的な託宣の趣きすら漂う古代歌謡の一つであるが、その中の一節に

…山県に　蒔きし　あたね春き　染木が汁に　染め衣を　まつぶさに取り装ひ…　（古事記　上巻）

とある。「山の畑に蒔いた茜草の根をついて採った染め草の汁で染めた衣を、すっかり着ととのえて……」というこの描写は、素朴な染色の様相をしのぶことができる貴重な資料でもあり、さらに、

紫は灰さすものぞ海石榴市の八十の衢に逢へる児や誰　（万葉集　巻十二）

などは、紫草の汁に椿の灰を加えて染料の「紫」を取る技法が鮮やかに歌いこまれているし、「延喜式」の縫殿寮の条には、宮廷の染色の施設・用度・染料などが詳細に記録されている。また時代はかなり下るが、

これは染殿。こたち十人ばかり、女子ども廿人ばかり、大きなる鼎立てて、染草色々に煮る、盥ども、人ごとに据ゑて、手ごとに物ども染めたり。槽どもに女の子どもおり立ちて、染草洗へり。

（宇津保物語　吹上・上）

という中古の叙景なども興味深い。

それら染色の原料となった植物を、たとえば万葉集から幾つか拾うと、

月草に衣そ染むる君がため綵色の衣を摺らむと思ひて　（巻七）
紅に衣染めまく欲しけども着てにほはばか人の知るべき　（巻七）
月草に衣は摺らむ朝露に濡れて後には移ろひぬとも　（巻七）
住吉の浅沢小野の杜若衣に摺りつけ着む日知らずも　（巻七）
秋さらば写しもせむとわが蒔きし韓藍の花を誰か採みけむ　（巻七）
思ふ子が衣摺らむにほひこそ島の榛原秋立たずとも　（巻十）

紅の花にしあらば衣手に染めつけ持ちて行くべく思ほゆ　（巻十一）

などが見え、すでに古くから、長い歳月にはぐくまれた古代人の豊かな知恵と体験は、「紫草」や「茜」の根、藍草の葉や茎、「橡」の実、「露草（月草）」や「紅花（末摘花）」の花弁、「黄蘗」「楢」「胡桃」「榛」の樹皮、などに秘められている天然の色素をみごとに見いだし、これを染料として活用していたことがわかる。また、縫殿式・内蔵式などには、蘇芳・紅花・支子・紫草・茜・黄櫨・藍・黄蘗・刈安草などの染料名が見え（延喜式　巻十四・十五）、「令」の衣服令の服色条には

凡服色、白。黄丹。紫。蘇芳。緋。紅。黄橡。纁。蒲萄。緑。紺。縹。桑。黄。楷衣。蓁。柴。橡。墨。如此之属。当色以下。各兼得服之。

（令集解・令義解）

とあって、すでにかなり多彩華麗な服色の様相を思いやることができる。

しかし、同時に、これら素朴未熟な染色の時代にあっては、衣を染めた色が水に濡れて落ちたという伝えもまた多い。その有名な一例を古事記から引こう。仁徳帝に遣わされて、その御歌を、山城の筒木の宮の皇后「石之比売」のもとに届けに行った丸邇の臣「口子」の話である。

かれ、口子の臣、この御歌を曰す時に、大雨降りき。ここにその雨も避らず、前つ殿戸にまゐ伏せば、後つ戸に違ひ出でたまひ、後つ殿戸にまゐ伏せば、前つ戸に違ひ出でたまひき。かれ、匍匐進起ひて、庭中に跪ける時に、水潦、腰に至りき。その臣、紅き紐著けたる青摺の衣を服たりければ、水潦、紅き紐に触りて、青みな紅になりぬ。

（古事記　下巻）

筒木の宮の庭前にひれ伏す口子の臣の着物の紐の紅の色が、雨に濡れて落ち、青摺の衣を赤く染めたというこの情景は、この物語の前後をいろどる仁徳帝の御歌や、口子の臣の妹「口比売」の歌などと調和して、美しい色彩感ににじんだ古代の抒情を醸し出している。それゆえに、

榛に　衣は染めむ　雨降れど
雨降れど　移ろひがたし　深く染めてば

（神楽歌　榛）

の神楽歌をはじめ、

はねず色の移ろひやすき情なれば年をぞ来経る言は絶えずて

（万葉集　巻十二）

紅に染めてし衣雨降りてにほひはすとも移ろはめやも

（同　巻十六）

紅は移ろふものぞ橡の馴れにし衣になほ若かめやも

（同　巻十八）

など、いずれも衣の色に託した相聞歌として、移ろいやすい〝色〟にも似た人の心のはかなさを、いみじくも歌いつくしてあますところがない。

ともあれ、このように、淡くあえかなる古代の色は、とかく移ろいやすく褪せやすく、薄れ消えやすいものでもあった。それだからこそ、たやすくは褪色したり落ちたりしない染料で、より美しい色彩に、糸や布を染め上げる技術が要求されたのであり、そしてそのためには、大陸の先進文化によって磨かれた、高度の染色技法の導入・習得が不可欠でも

あった。それゆえ、

韓人の衣染むとふ紫の情に染みて思ほゆるかも　（万葉集　巻四）

は、大陸のすぐれた染色工芸への憧憬を織り込み、さらに、

河内女の手染の糸を絡り反し片糸にあれど絶えむと思へや

（同　巻七）

の歌は、帰化人の多かった河内国の染色技術をいみじくも伝えて興味深い。事実、姓氏録に見えた「常世連」の中の一族も「河内国諸蕃」に属して、この国を拠域としていたことを窺わせるが、このように、大陸系帰化人と染色との関係はまさに密接不離であり、外来のすぐれた染料の製造法やその染色法に、独特にして高度の技術や伝来の秘法を駆使したであろう帰化氏族「赤染部」が、ユニークな特殊技能集団・職掌部としての存在意義を誇ったのもまた当然であったし、これら赤染部の渡来によって、わが国の古代染色技術が飛躍的に進展したであろうことも想像に難くないと言えよう。

二

こうして「常世連」の姓を賜わった赤染氏一族が、高度の染色技術を持った中国系帰化人の職掌部であった事実を論拠の有力な手がかりとして、それでは次に、この一族がどうして「常世」姓を名のったのであろうかということに焦点を絞って考えてゆこう。もちろん続日本紀によれば、赤染氏がみずから常世連を名のったのではなく、朝廷からその姓を賜わったということになっているが、形式上は褒賞的色彩を持つこれら「賜姓」も、もともとは、当時の中小豪族たちをして、従来の部民支配を固めつつその世襲的地位を保持させて、朝廷の服属下にくり込むための政策の一つであり、その氏族に最も由緒の深い誇り高い高次の姓を名のることを許して、これを賜わるという形にするのが慣例であったはずである。それだから、この「常世」という姓も、赤染一族にとっては、その系譜と職掌に関する深い由緒を持った栄えある姓であったにちがいない。「赤染」と「常世」、これら二つの姓はいったいどういう関連を持っていたのであろうか。

延喜式神名帳に「常世伎姫神社（河内国大県郡）」という社名が見えるが、この地が常世連の本拠であり、その姓はこの地名に由ったものかと太田亮氏は説き、さらに「一に常世国とは燕国にて、この氏、その地より来りしに拠るとの説あり（姓氏家系大辞典）」と言う。しかし、一つの姓の成立が、地名に由ったものか、逆にその地名がそこを本拠とした氏族名に由来するものか、の関連は相対的であり、この常世伎姫神社の社名にしても、それを崇祀した氏族の名称や氏神名が反映しているのかもしれず、決め手に乏しい憾みがある。また、いわゆる「常世国」が、具体的に大陸の「燕」をさすものであったかどうかも、なお問題があろう。やはり、それにはまず、その名の示す「常世」という古代のイメージから解きほぐして行かざるを得ないようである。

古代文献に見える「常世」の理念は、すでに多くの先達によって論証されているので、今さら冗舌を要しないが、とにかくそれは、記紀の神話体系が完成する以前の旧き世界像の中で、われわれの遠い祖たちが憧憬と幻想をもって描いた理想の異郷であり、恒久の時が続く不老と不死

の仙境でもあり、遙かなる大海原の彼方の祖霊のいます地とも信じられたのである。古き物語の折節に漂う、その、この世ならぬ「世」へのファンタジーは、少彦名命が熊野の御碕から、また淡島から、粟茎にのぼりはじかれて渡ったと伝えられもしたし（日本書紀　巻第一）、御毛沼命が波の穂を踏んで渡ったという海彼の地への郷愁ともなり（古事記　上巻）、また、丹後国の水の江の浦島子が、亀姫に伴われて行ったわたつみのただ中の奇しき島への慕情とも密着し（丹後国風土記）、さらに、垂仁帝の詔を受けた多遅摩毛理（田道間守）が「時じくの香の木の実」を求めて、万里の波を踏み十年の歳月をかけて往還した「神仙ノ秘区、俗ノ至ラムトコロニアラズ」という絶域とも描かれたのであった（古事記中巻・日本書紀　巻第六）。それゆえに、常世国からの寿福をもたらす千波万波の頻浪は、永遠の時間と空間の次元を超えて、この国の蒼古の海辺にひたひたと波打ち寄せていたとも想念されたのである。

子らに恋ひ朝戸を開き吾が居れば常世の浜の浪の音聞こゆ

（丹後国風土記）

古語に、神風の伊勢の国、常世の浪寄する国と言へるは、蓋しこれ、これを謂ふなり。

（伊勢国風土記）

そしてまた、かかる呪的な想念の世にあって、この常世国にいます「常世の神」は、折々その国からこの人間世界を訪れて、長寿と福徳をもたらすとも信じられたらしい。折口信夫博士はこれら来訪神を「常世のまれびと」と呼んだが、それは同時に、古き祖霊神と豊饒神の印象を強く投影している神格でもあった。

しかし、興味あることは、この常世神のイメージは時代とともにしだいに変貌・屈折したものらしく、日本書紀によれば皇極天皇の三年七月、東国の富士川のほとりの「大生部多」という人が、虫を祭ることを村里の人にすすめて「コレハ常世ノ神ナリ。コノ神ヲ祭ル者ハ、富ト寿トヲ致ス」と言ひふらし、巫覡たちも「常世ノ神ヲ祭ラバ貧シキ人ハ富ヲ致シ、老イタル人ハ還リテ少ユ」と偽りの神託を下したという話がある。かくて、

都鄙ノ人、常世ノ虫ヲ取リテ清座ニ置キテ、歌ヒ舞ヒテ、福ヲ求メテ珍財ヲ棄捨ツ。カツテ益ス所無クシテ、損リ費ユルコト極メテ甚シ。ココニ葛野ノ秦ノ造河勝、民ノ惑ハサルルヲ悪ミテ大生部多ヲ打ツ。ソノ巫覡ラ恐リテ勧メ祭ルコトヲ休メキ。時ノ人、便チ歌ヨミシテ曰ヒシク、

太秦ハ神トモ神ト聞コエクル常世ノ神ヲ打チ懲マスモ

（日本書紀　巻第二十四）

という結末が伝えられているのだが、つまり、もともと長寿と福徳をもたらすと信ぜられた常世神のイメージと信仰が、もうこの時代には、かなり伝説化し俗信化して流行し、かえって社会的に弊害をもたらしたらしい様相がうかがわれるのである。そしてこのような現象は、この常世神の事件に限らず他にも散見し、たとえば続日本紀の光仁天皇・宝亀十一年の条には

勅二左右京一、如聞、比来無知百姓、構二合巫覡一、妄崇二淫祀一、芻狗之設、符書之類、百方作レ怪、塡二溢街路一、託二事求福一、還渉二厭魅一、非二唯不レ

畏ニ朝憲一、誠亦長養ニ妖妄一、自今以後、宜ニ厳加ニ禁断一、如有ニ違犯者一、五位已上録レ名奏聞、六位已下、所司科決、但、有レ患祷祀者、非レ在ニ京内一者、許レ之、（巻三十六）

ともあって、古代呪的信仰の残滓がかなり根強く蟠踞していたことがわかる。

さて、それはともかくとして、今、先の皇極紀の記述で注目したいのは、その常世神が虫の形をしていたということで、

此ノ虫ハ、常ニ橘ノ樹ニ生ル。或イハ曼椒（ホソキ）ニ生ル。其ノ長サ四寸余リ、其ノ大キサ頭指バカリ。其ノ色、緑ニシテ黒点アリ。其ノ形、モハラ養蚕（カヒコ）ニ似レリ。

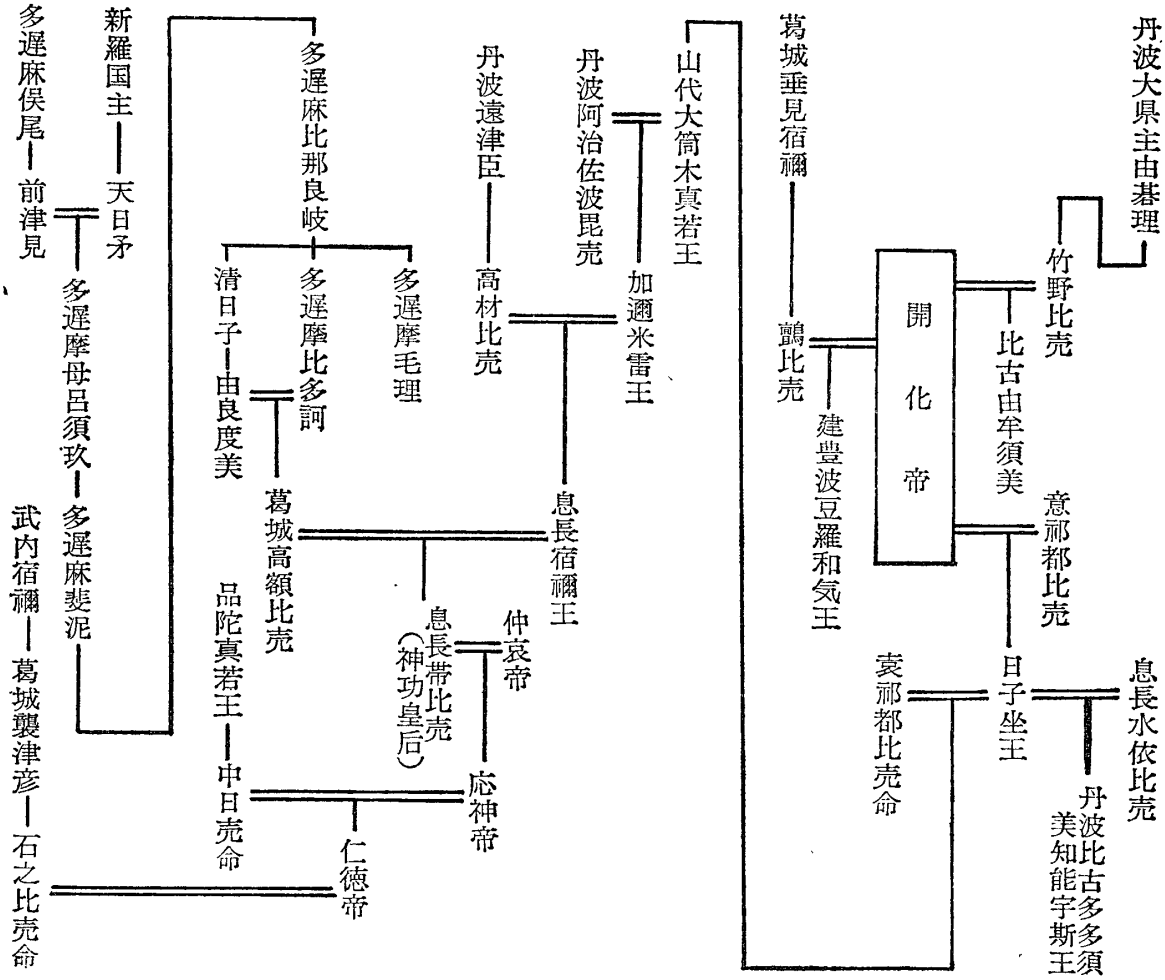
と説明も詳細である。このような常世神の御神体、つまり「橘か山椒の樹に生ずる蚕によく似た緑色の虫」という姿態は、現代的解釈のさかしらでは、あるいはアゲハチョウの幼虫などかとも考えられる余地があるが、しかし重要なのは、古く、野生の蝶（チョウ）や蛾（ガ）つまり鱗翅目の幼虫で、繭を作るクワコやそれに近い虫類を採って、これを飼養・改良したものが「カイコ」であり、それゆえに、古来「ムシ」と言えば、主として蚕をさすのが普通であったということである。そしてここで連想されるのが、前述したタジマモリが常世国から採って来たという奇しき果実は、古事記によれば、「その時じくの香の木の実は今の橘なり」と補足されていたことである。即ちここで、「常世国―橘―蚕に似た虫」という連鎖がかなり鮮明に浮かび上がるのだが、今その検討はあとまわしにして、暫くこのタジマモリの系譜を探ってみよう。

タジマモリは、その名の示すとおり、山陰道の但馬国を本拠とする「但馬氏」の主流であって、この一族を含めて丹波・若狭・近江・淡路・摂津等の地方にわたって、広大な分布を見せていた大陸系帰化人の部族を総称して「出石（いずし）人」という。古事記に見える朝鮮の新羅の国主の王子「天の日矛」の伝承によれば、新羅国の阿具沼のほとりで昼寝していた賤の女が、日光に感精して赤い玉を生んだ。それを手に入れた日矛は、その赤玉が化した美女を妻としたが、のち心奢ったため妻に逃げられ、そのあとを追ってわが国に渡来し、ついに但馬国に漂泊土着して但馬族の女をめとり、これら出石人の始祖となったという太陽神話的な卵生説話が伝えられている。その系譜をたどれば、タジマモリはこの天の日矛から数えて四代目の裔であり、さらに神功皇后の母君「葛城（かつらぎ）の高額比売（たかぬかひめ）」もまた、このタジマモリの姪であったとされていて、わが古代史上、重要にしてかつ多くの謎を秘めている一族なのである。そして留意すべきは、わが記紀神話の中には、この出石人によって媒介された伝承の残映がかなり大きな比重を占めていて、このタジマモリや丹後の浦島子が渡ったという常世国の想念もまた、この出石人が伝承した説話圏内に包含されるらしいということである。推論を拡げるならば、この帰化系氏族が伝えた「常世」のイメージは、あるいは己れたちの遠い祖先の故国の地である海の彼方の大陸への郷愁の伝承と重なっていたのではなかったか。

わが原史時代における、大陸からのさまざまな直接的影響については、すでに「騎馬民族説」などを始めとして、多くの斬新な仮説や推理

が展開されているが、古代文学にちりばめられたこの「常世」の映像は、記紀によって完成した宮廷神話の構想以前の、蒼溟な世のわすれがたみであり、それはあるいは遠く大陸からの伝承の残像が、濃い陰翳を投げかけているのではないかという魅力的な暗示をも秘めているのである。「常世国」がすぐそのまま「燕国」であるという設定には、なお多くの難点があろうが、ただ、古来、常世とこの国との間を往き通うと信ぜられた「常世の鳥」のイメージが、雁とそして燕（つばめ）によって代表されることが多かったという発想も、単なる字面の符合のみならず、なお複雑な連想を内包していたはずである。

次の糸口をたぐってみよう。先に触れたように、神功皇后の母君「葛城の高額比売」もこの常世の伝承をもった「出石人」一族の出自であったという。そこでこんどは、この「葛城」という名称に焦点を絞って考えてゆこう。但馬氏と葛城氏との関係は、後に系譜によって考証するが、この但馬一族の中に「葛城」の名を冠する姫がいたということは、実に貴重なつながりの糸であるとの印象が強い。言うまでもなく、葛城氏とは、大和国の葛城地方一帯を根拠とする古代豪族で、中でも有名な「葛城臣」は武内宿禰の裔と伝えられているが、この武内宿禰の後裔たち、即ち、葛城氏・蘇我氏・平群氏・巨勢氏・紀氏等の一族が、帰化系氏族と密接な関係のあったことは、記紀の随所に見いだされる特色である。その実相についてはさらに検討を要するが、しかしたとえば、この一族の人名だけを一瞥してみても、どうしても異国的な素因を含んでいる印象をぬぐいきれない。一族中の蘇我氏の「高麗」「蝦夷」や、巨勢氏の「胡人」らの名は、多分にエキゾチックな雰囲気を持っているし、また、蘇我氏の「韓子」、葛城氏の「韓媛」などという名は、「大日本人娶二蕃女一所レ生為二韓子一也（継体紀　二十四年）」のように、わが国人と異国の女性との間に生まれた子の謂であり、さらに、蘇我入鹿のまたの名を「鞍作」と言った（皇極帝前紀）が、鞍作り・鞍部は本来、帰化人たちの専職の一つであったことや、そしてまた、古代、大陸への遣外使として派遣された人々が、帰化系氏族のほかは主としてこの武内宿禰の末裔の一族だったこと、等々、いずれもかなり暗示的な証左として、記紀を綿密に検索抽出してゆけば確認できる。その中でも、武内宿禰の子で葛城氏の宗祖ともいうべき「葛城襲津彦」は、遣外使として何度も朝鮮に派遣されたと伝えられる伝説的な武将であるが、その女「石之比売（磐之媛）」は、前にも触れたように、仁徳帝の皇后として史上あまりにも有名である。古事記には、この石之比売皇后が木の国に行啓なさっていた留守に、仁徳帝が八田の若郎女を後宮に入れ給うたという話がある。旅の途中でそれを聞いた皇后は怒って都に帰らず、そのまま御船を淀川上りに山城国に入れ、「筒木の韓人、名は奴理能美が家に入りましき」と記されている。山城国筒木は今の京都府綴喜郡で、古く帰化人の多かった地として知られており、この話は、葛城氏と「韓人」、つまり朝鮮系帰化族と密接な関係があった明らかな証左であると言える。そして、この筒木を根拠とする「大筒木氏」が、葛城氏のみならずいわゆる出石人一族とも密着していた印象は、記紀に伝える諸系譜の中に濃い翳を落としている。その顕著な例証を、古事記に誌された関連系譜に見れば別



掲のようになる。（上段の系図参照）

煩雑になるので関係部分の略譜だけを掲げた。もちろん、これらの系譜伝承がそのまま史実ではあり得ないだろうが、しかし帝紀や旧辞にもとづくそれら説話編成の潤色や屈折を濾過して見ても、そこには、皇室をとりまく古代豪族たちの古き呪的な信仰と血縁に裏づけられた密接な関係が、濛朧と浮かび上がってくるのであり、特に、筒木氏や葛城氏と但馬氏・丹波氏などの出石族との相互の血のつながりを随所に見ることができ、まごうかたなき帰化系素因が濃厚な血族圏内の諸族であることが明白である。なお、この古代の丹波一族は、後漢系統の坂上氏の流れを引いた後世の丹波氏とは別で、明らかに、古き丹波国を本拠とする前記出石人の系統である。

論旨が回り回って迂曲したが、これまでたどってきた筋道は、タジマモリなどによって代表される「常世国」の伝承を持った出石人たちと、大和の葛城氏と山城の筒木氏が、実は帰化系血縁をもって密接に連鎖していたらしいということの確認なのである。

さらに糸をたぐってゆこう。石之比売皇后が筒木の宮に入ったまま都に戻らないので、仁徳帝は口子の臣を遣わして歌を贈ったという話は先に引いたが、その後、

ここに口子の臣、またその妹口比売、また奴理能美、三人議りて、天皇に奏さしめて曰さく、「大后の幸でませる故は、奴理能美が養へる虫、一度は匍ふ虫になり、一度は殻になり、一度は飛ぶ鳥になりて、三色に変る奇しき虫あり。この虫を看そなはしに、入りませるのみ。

更に異しき心まさず」とかく奏す時に、天皇、「然らば吾も奇しと思へば、見に行かな」と詔りたまひて、大宮より上り幸でまして、奴理能美が家に入ります時に、その奴理能美、おのが養へる三種の虫を、大后に献りき。

（古事記　下巻）

ここに言う「三色に変る奇しき虫」とは、幼虫からサナギへ、さらに羽化して蛾になる鱗翅目の中でも身近で代表的な「蚕」のことをさしているのであるが、ここで確かめられるのは、この朝鮮系帰化人「韓人・奴理能美」が蚕を飼っていたということであり、それもおそらく、在来の日本種よりもすぐれた中国種の蚕を飼育し、大陸系の技術を駆使したかなり大規模の養蚕であっただろうと想像できる。

わが国の養蚕の歴史は非常に古く、すでに魏志倭人伝にも、「種禾稲紵麻、蚕桑緝績、出細紵縑綿」とあるほどで、記紀にも、天照大御神の機織りの話や、穀物の女神大気都比売の死体の頭に蚕が生じたという神話などがある。この養蚕、そしてそれに伴う製糸・染色・織布の技術は、特に帰化人たちの特殊技能集団である職掌部の力によって大きく発達したのである。

一方、この蚕を御神体として崇祀する蚕神信仰は、たとえば、出雲風土記の「虫野の社」「立虫の社」とか、続日本紀や文徳実録等に見える丹後国の「大虫神」「小虫神」、延喜式神名帳の「虫鹿神社（尾張国）」「蚕養国神社（陸奥国）」「大虫神社・小虫神社（越前国）」「大虫神社・小虫神社（丹後国）」「立虫神社（出雲国）」などの社名にその印象を残しつつ、後世にまで根強い習俗となって流れてゆく。現在でも、東北地方一帯に見られる「おしらさま」「おしら神」などという、桑の木で作った二体一組の御神体を祀る民俗信仰は、ふつう蚕の神と考えられており、それとともに「おしら祭文」などの唱え詞や「蚕の草子」のような民間説話の系統が広く分布しているが、それらについてはすでに多くの論考もあり、ここでもあまり深入りする余裕がない。

ただ、「常世」と「蚕」との関係について、かなり暗示的な傍証をあげてみよう。前述の「少彦名命」は、記紀によれば、大国主神との国土経営を終えられて最後は常世国に渡ったと伝えられる「常世神」的性格の濃い「小さ子神」であったが、この神が大国主神と初めて出逢った時の様子を、古事記は、

故、大国主神、出雲の御大の御前に坐す時、波の穂より天の羅摩船に乗りて、鵝の皮を内剝に剝ぎて衣服に為て、帰り来る神ありき。

（上巻）

と描写している。「天の羅摩船」とは、ガガイモの実を割った小さな舟の意味だと考えられているが、問題は「鵝の皮」を丸はぎにして着物にしているという記述である。「鵝」はいうまでもなくガチョウのことであるが、この小さな神の衣服としては不相応だというので、古事記伝には、この「鵝」は「蛾（ひむし）」の誤りであろうとしている。もしこれが「蛾」ならば、古く「ムシ」とは蚕の代名詞でもあり、また、

…蚕衾（むしぶすま）柔やが下に　栲衾　さやぐが下に…

（古事記　歌謡）

夏蚕（なつむし）の　蝿（ひむし）の衣　二重著て　囲み宿りは　あに良くもあらず

（日本書紀　歌謡）

などのように、「蛾」は、特に「蚕」の蛾、またはさなぎをさすのが普通であった。

こうして、少彦名命という常世の神が、蚕の蛾の皮の衣を着ていたというのであれば、少彦名命―常世神―蚕神、のイメージに重なって、常世と蚕との関係はまさに疑う余地のないほど明確になろう。さらにダメを詰めるなら、前述したように、この少彦名命は淡島から常世国に渡ったとされている（日本書紀）が、この淡島で連想されるのは、イザナギ・イザナミの両神が初めて生んだ御子が「水蛭子神」と「淡島」であった。そして、淡島に直結するこの蛭子の名の「ヒル」が、蚕の蛾を「ヒヒル」と言うことの関連相似に密着して、いっそうその連鎖を固めることができるのである。さらにもう一つ、雄略紀六年に見える有名な話がある。

三月ノ辛巳ノ朔丁亥ニ、天皇、后妃ヲシテ親ラ桑コカシメテ、蚕ノ事ヲ勧メムト欲ス。爰ニ蜾蠃、誤リテ嬰児ヲ聚メテ、天皇ニ奉献ル。天皇、大キニ咲ギタマヒテ、嬰児ヲ蜾蠃ニ賜ヒテ曰ハク、「汝、自ラ養ヘ」トノタマフ。蜾蠃、即チ嬰児ヲ宮墻ノ下ニ養ス。仍リテ姓ヲ賜ヒテ、少子部連トス。

（日本書紀　巻第十四）

つまり、ここでは「蜾蠃」という人が「蚕」と「児」を聞き違えたという笑話的挿話になっているが、この「蚕」と「小さ子」との連想思念は、実はかなり古い伝承に裏づけられているのではなかろうかと考えられ、同音による「こ」違いのこの話などは、それらの残像を踏まえた後世的な趣向であろう。即ち、ここでもまた、常世神＝少彦名命のイメージを継承する「小さ子」と「蚕」の結びつきが鮮やかに残っているといえよう。

ここで、これまで検討し確認してきたいくつかの項を、主題の論旨に代入してみれば、

常世国〈常世神――少彦名命――蛾の服――蚕
　　タジマモリ――橘――橘の木につく蚕に似た虫――常世の神〉蚕神――養蚕――筒木の韓人――葛城氏――出石人――常世の伝承

という連環がつながってくることがわかる。そしてその次は、この連環サークルと、前章で考察した「常世氏―赤染氏―染色職掌部」のチェインとが、具体的にどう連結するかを考えなければならない。

三

一章と二章でそれぞれ考察した二つの連鎖間の接点は、単に常世氏と常世国という「常世」の名の相通だけではない。もちろん、この共通名が単なる偶然ではないということも、これからの論証で裏づけてゆくのであるが、それを踏まえてさらに確かな環を見つけなければならない。

まずその鍵になるのは、前述の皇極紀の中で「常世神」という虫神信仰を推進した「大生部多」という人物のことである。この大生部という姓は、他の古記録にはあまり見られないもので、どういう素姓の系譜なのかほとんどわかっていない。ただわずかに、続日本紀の聖武天皇の神亀元年二月に「大生部直三穂麻呂」という人が、他の多くの人々とともに私穀を陸奥国の鎮所に献じて、外従五位下を授けられたという記録が

あり、また神亀三年の山城国出雲郷計帳に「従五位下大生部直美保麻呂」という同人らしい名が残るぐらいである。この「大生部」は、普通、「オホフベ」と訓まれているのであるが、続紀伝本の一には「大一作レ壬或作レ犬」とあって、この「大生部」は、あるいは「壬生部」か「犬生部」の誤伝かとも考えられている。事実「大生」はオホフともオホミブとも呼ばれた痕跡があり、したがって「大生部」もオホフベのほかにオホミブベとも訓める可能性があるわけで、他に「生部」をオホブ・オホベと訓む例などもある。また、陸中国に「大生（オオカイフ）」という地名があり、これは今、岩手県の「大ケ生（オオガユウ）」と訓まれているが、もとは「大ケ生（フ）」であったものから転じた名称であろうと考えられる。とにかく、この「大生」についての訓み方はなお検討の余地が多く、かなり難解な姓の一つと言えよう。

さて、「大生部」が「壬生部」の誤伝かという疑点や、「大生部」が「大壬生部」と同じかもしれぬという問題は、また後で検討することにして、まず「大生」という名称の意味について考えてみたい。

もともと「生（ふ）」とは、「麻生」「粟生」「蓬生」などの例をあげるまでもなく、草木の生えているところ、または畑などを意味したが、同時に、それらの土地に生えるものをも「ふ」と称したのではなかったか。そしてそれと関連印象的に考えられることは、この大生の「生（ふ）」は「布（ふ）」と相通するのではないかという疑問である。「ふ」の古代発音については万葉仮名の甲類・乙類の別がないから、この連想を一応推してみよう。いうまでもなく、古代における「布（ふ）」とは、絹以外の楮や麻などの植物性繊維の総称であり、「麻布（あさふ）」「木綿（ゆふ）」「太布（たふ）」などの名称として残っている。中でも「太布」とは、科（しな）の木や楮の樹皮の繊維を紡いで織った布のことであるが、この「太布」と「大生」との同音の相通ぶりは偶然であろうか。いやたとえ「太布」がそのまま「大生」でなくても、「大生」が「大布」の印象を複写している徴証は見落とせない。たとえば常陸国風土記の中に行方郡の「大生の里」という地名が見え、現在の潮来町大生の地だと言われている。風土記では、倭建の命に関する物語で「大炊の義を取りて、大生の村と名づく」という地名発祥説話になっているのであるが、それはともかくとして、この「大生」に対応してすぐ想起される地名が、同郡の「麻生」であろう。風土記には「古昔、麻、潴水の涯に生へりき」と地名の由来が説かれているが、この「大」―「麻」の対応、「布」と「生」との相関は、かなり暗示的な素因を含んでいて、なお検討の余地があろう。そして、さらに興味深いのは、この常陸国の大生の里から起こったといわれる一族が「大生氏」を名のって後世まで続いており、これは平氏に属して先祖を「石河」と称したという（姓氏家系大辞典）。この「石河」ですぐ連想されるのが、蘇我氏の一族、石川臣・石川朝臣であり、また坂上田村麻呂の裔といわれる陸奥の石川氏であり、いずれも、古代の帰化氏族と密接な関係がある氏姓なのである。

もうすこし関連傍証を推せば、「太布」で連想される地名に「多武峰（たふのみね）」がある。この山は古く「タム」と言ったらしいが、ム＝フの音通は相対する。

ふさ手折り多武の山霧しげみかも細川の瀬に波の騒ける

（万葉集　巻九）

この「ふさ手折り」の解釈には諸説があって、普通「たふ」にかかる枕詞とされているが、今「たふ」を「太布」と解すると、この「ふさたをり」は、布を束ね畳むという意味あいが強くなるであろう。史上「多武の峰」は藤原鎌足の由緒・伝説で有名だが、しかし、そのもっと以前から、この「たふの山」は、古く織布や衣の信仰を伝えていた職掌部たちの聖地ではなかったか。事実、衣を山の上に干して身心の蘇えりを期する呪儀は、古来の神衣祭や更衣祭の信仰と伝統の中から、いわゆる「衣更え」の年中行事として定着してきたが、

春過ぎて夏来るらし白栲の衣乾したり天の香具山　（万葉集　巻一）

筑波嶺に雪かも降らる否をかもかなしき子ろが衣乾さるかも

（万葉集　巻十四）

などの古歌の中に、香具山や筑波の嶺を神聖な信仰の地として祀ってきた、遠き代の衣の呪儀の伝統を透視することができる。

こうして考証を重ねてくると、「大生」と「大布」の映像はますます二重写しにならざるを得ない。そして、大生部氏が蚕に似た虫を崇祀していたという事実からも、あるいは、紡糸・織布を専門とする職掌部「布部」が、自らの名称の上に「大」という美称をつけたのではなかったろうかとさえ憶測される。事実「布部」という地名は、現在も島根県の布部川沿いに残っている。

この辺で前に触れた「壬生部」と「大生部」との関連について考えてみよう。前述したように、大生部はオホフベ・オホミブベとも訓むことができ、したがって「大生」は「大壬生」あるいは「大壬部」の略されたものが多いという（姓氏家系大辞典）。大生部＝大壬生部という等式の成立についてはさらに多くの検討を要しようが、しかし、たとえ、この両項が等質ではなくても、かなり密接な関係にあったことは十分考えられる。「大生」が「壬生」の誤伝であるかどうかはさておき、もし「大生部」が蚕神信仰を持った養蚕・織布を専業とする職掌部であるならば、「大壬生部」「壬生部」との関連はかなり重要である。

言うまでもなく、「壬生部」とは「乳部」とも書くように、古く、皇子の養育料を負担する職業部であり、皇子の生れるたびに定められて、大湯坐・若湯坐・飯嚼・乳母などの職掌に分かれていた。つまり、皇子の産湯と食事を掌る部であったのである。こういう性格を有する「壬生部」との関連で「大生部」を考えてみると、「大生部」とはあるいは皇子の神聖な衣服を製作・調達する職掌部ではなかったろうか。もしそうならば、「壬生」「大生」の生は、新しい皇子の「誕生」に際して奉仕する「生部」の意かもしれない。そして、壬生部は食事を、大生部は衣服を、それぞれ掌った重要な役割で共存していたとも考えられる。それゆえに、この二つの部の分担職掌の近似的印象が混同し密着化して、オホフベもオホミブベも区別なく総称されるようになったのかもしれない。

そうすると興味深い推論が可能になる。皇極紀によれば「常世神」を崇祀した「大生部氏」を撃ったのは「秦河勝」であったという。「秦氏」とは言うまでもなく、秦の始皇帝の流れを引く中国系帰化氏族であると

されているが、一説には、これを新羅系氏族であるとする論証もある。とまれ、この秦氏一族は、淀川流域一帯を中心に広く畿内に繁住したが、この一族が特に有名なのは、大陸系の養蚕・機織りの技術をもって朝廷に仕えていたということである。「秦」をハタと訓ませたのも、その職掌からの名であろうと言われている。つまりこれまでの徴証をもってすれば、大生部氏は実に秦氏と同じ養蚕・機織の職掌であったということになり、それゆえにこそ、大生部氏の勢力拡大を阻止しようとする秦氏が常世神の信仰盛行に口実を設けて、この同業の対抗勢力を叩いたのではなかったか。そして、それはもちろん、単なる商売仇きどうしの勢力争いというより、古き呪的な世においては、それぞれの職掌部が伝統的に斎き祀る職掌神をめぐっての、厳しい信仰の対立であったと考えざるを得ない。それはあるいは、秦氏が崇祀したと思われる「韓神」信仰と、大生部氏が信捧した「常世神」信仰との相剋の歴史の伝承化かもしれない。皇極紀のあの奇妙な常世神に関する記述は、単に大生部氏が珍らかな虫神の迷信で人心を惑わしたというような皮相的な解釈に止まることなく、実に、このような呪術と信仰を有した職掌部どうしの、複雑な関連と裏づけをもって理解されなければなるまい。一説によれば、この「大生部多」は、古くからの民衆の呪術を司祭した民間の巫覡であったという考えもあって傾聴すべきだが、それもまた、この虫神信仰を捧持した職掌部という系譜にくり込まれてこそ、いっそう強い裏づけを持つのではあるまいか。

結論に入ろう。まごうかたなき職掌部の一つである「大生部」氏が、蚕に似た虫「常世神」を信捧していたという虫神崇祀の特性系譜を強く見せていることから推せば、「大生部」とは、単なる民間呪儀の巫覡というにとどまらず、もっと具体的に、「大生」つまり、広大な麻畑や桑畑や楮の樹林などを領有して、養蚕・紡糸・織布を扱う専門の職掌部であったと考えられ、ここまでくるとそれは、糸や布の染色を専職とする赤染氏―常世氏の系列と、もう全く同心円内に入ってしまうのである。

さらに傍証を固めるなら、前述の続日本紀に見えた「大生部直」は、これら大生部の伴造であったと考えられるが、その他に「大生直」という姓も見え（伯馬国司解―天平勝宝二年）、この両者は明らかに相通ずる姓氏であって、しかも、この大生直が「但馬国出石郡穴見郷戸主大生直山方」のように、但馬国の出石地方の豪族として明記されていることは、この大生氏が、疑いなく出石人の一族であったことを証明しており、二本の別々の連鎖は、ここに失われたリングを見出だして連環円結することができる。

古く、これら染色・織布などの専門職能の仕事は、朝廷にあっても「織部司」がとりしきっていたが、常世氏・大生部氏などは、民間における織物・染物の職掌を継承したのであろうし、それらの伴造が、それぞれ赤染造・大生部直だったのである。そして、これら二氏とも大陸系帰化氏族であり、それは、外来神的な常世神＝蚕神崇祀の呪儀を伝承信捧しつつ、養蚕・紡糸・染色・織布という高度の先進技術を駆使した、古代のすぐれた職掌部にほかならなかったということである。

古く、燕国をさして常世国と言ったかどうかは定かではない。しか

し、叙上の考察を通じて言えることは、「常世国」の印象と物語は、かなり出石人たちの伝承と密着していたこと。そして燕系職掌部「赤染」部もまた、これら出石人たち外来帰化族の一派であったらしいこと。さらに、それら専門の職能や信仰を通じて、「大生部」氏ともまた密接不離の関係にあったらしいこと、等々であり、史上、散発・隠顕するこれら資料の輪を、論理の連鎖に次々と編んでゆくと、ゆくりなくも、そこに古代の帰化系職掌部の呪的な信仰と伝承の様相が、鮮明に浮かんでくるのを見ることができる。それゆえに、赤染氏が「常世」の姓を名のったのは単なる偶然や思いつきではなかった。それはまさに、深く遠い代からの祖たちの、信仰と伝承と職掌とに裏づけられた由緒ある栄光の系譜の名のりにほかならなかったのである。